

信 毎 俳 壇

坊城 俊樹 選

- 海の日や珊瑚の海も知らず老ゆ (松本市) 久我 綺乃
- 旅先のでで虫連れて帰りけり (長野市) 福沢 ナナ
- 愛猫の御霊乗せ来る黒揚羽 (長野市) 清水美佐子
- 短夜や声まで残る妻の夢 (松川村) 岡 豊村
- 理髪屋の鏡の植田そよぎをり (松本市) 田中 佐彦
- 盛り上がる胸板確と夏の服 (東御市) 大塚くに男
- うぶすなの風を遺影に青すだれ (長野市) 萩原 宏祐
- 夏祭大きな山車に太き笛 (長野市) 宮沢 信博
- 玻璃鉢の金魚きらめく朝日影 (下諏訪町) 中村 久
- 田植衆笑ふ人あり泣く人も (長野市) 中沢 義寿
- 佳作
- 遠雷に牛一方に動き出す (長野市) 松本 宏斐
- けものらの楽園であり方緑裡 (飯綱町) 小林 紀子

一句目、「海の日」とは海の恩恵に感謝する日。真夏の珊瑚礁の海に行った事のある人は確かに実感はある。日本では沖繩あたりか。二句目、^{ウブスナ}鴉牛は通常は茶褐色のものが多いが、実はごく種類が多いらしい。作者はその中から気に入った一匹を持ち帰った。三句目、本当の家族のようにかわいがっていた猫が亡くなった。今眼前に舞っている黒揚羽はその化身なのだろうか。

選評

今井 聖 選

- 日雷ぬるま湯でのむアスビリン (長野市) 宮沢 朝子
- 何色の風を育てむ白団扇 (塩尻市) 古殿 林生
- 白薔薇の丈に程よき車椅子 (松本市) 伊藤 和夫
- 梅雨の夜の鏡の奥の吸血鬼 (松本市) 小林 幸平
- 目の前に犬をりにけり昼寢覚 (小海町) 依田 久代
- 回覧に「至急」とありし昼寢覚 (松本市) 田中しほす
- 葉桜の道に昔のベンチあり (佐久市) 小林喜久男
- 万緑の日本列島超巨木 (木島平村) 日台 敏夫
- 三十年プール通ひの吾日寿 (佐久市) 神津 武士
- 救急車夏鷲を驚かす (須坂市) 牧野 勇水
- 佳作
- 万緑に埋もるる谷を赤電車 (飯綱町) 小林 紀子
- 野球部の廊下を走る梅雨最中 (上田市) 竹内 創造

一句目、病気の熱を冷ます薬を飲んでいる。「ぬるま湯」はそのことのリアルティ。コロナはまだまだ要注意。そんな世を象徴する句。二句目、白団扇からどんな色の風が生まれるのだろう。ロマンの句である。三句目、白薔薇の咲く丈と車椅子の丈を比べた。情緒的な内容を空間構成的にまとめた。これも手腕。四句目、物語に興行きがある。現実にドラマを与える想像力に敬服。

選評

神野 紗希 選

- おかあさんのちつてなにあまのがわ (中野市) 風間 一乃
- 青田風諏訪湖を海と思ひし日 (伊那市) 中村 茂子
- 文明の地層のゆがむ羽抜鳥 (小諸市) 加藤 陽介
- 軽鬼の子のはじめて出会ふ牛蛙 (長野市) 福沢 ナナ
- 戦中派なれば護憲を沖繩忌 (長野市) 青木 武明
- 三伏や戸棚の間に黒砂糖 (松本市) 久我 綺乃
- 誘蛾灯の放電音やシャッター街 (佐久市) 木内利一郎
- 哺乳瓶しかと抱へる日傘陰 (松本市) 中村 百仙
- ラベンダー揉みし手の平瑛拭く (箕輪町) 柴 和夫
- 草刈の杣鯨の絵のヘルメット (中野市) 風間 陽介
- 佳作
- 夏雲や二人がかりで犬洗う (飯山市) 伊東 寛和
- 病葉や川の流れに逆らへず (長野市) 西本 真尋

一句目、こう問われたら大人として何と答えよう。名句とは大いなる問いをはらむもの。天の川が答えのように悠々と輝く。二句目、諏訪湖に風がわたるおらかなひと日、青田もひと続きに波を生む。三句目、大地を掘り文明を築くならば、地層もゆがむか。人類史のゆがみを羽抜鳥のあわれが語 語 する。四句目、軽鬼の子の初体験を通し、牛蛙が異質な迫力で立ちあはだかる。命の偶然の邂逅が楽しい。

選評